

倉橋惣三との対話 ②

「フランクネス」という教育性について

浜口順子

(大学教員)

欧米で強く感じた「教育性」

倉橋先生は、三十代の終わり頃（一九一九～一九二二年）、アメリカやヨーロッパ諸国で留学を経験されました。二十代の頃から、欧米の心理学や教育学、生理学、社会学などの先端的研究をいち早く、原著で読んでは食欲に吸収してこられた先生のことですから、文部省から在外研究の命を受けたときは、さぞかし心高ぶったことでしょう。

帰国して間もない時期に、「教育性の乏しき我國の社會」という講演をされていますね（『西倫理會倫理講演集』第三九輯 一九二二年 所収）。最近、その筆記録を非常に印象深く読みました。それは、欧米の教育事情に関する緻密で正確な報告ではありません。欧米という異文化に身を置いて目の当たりにした激しい社会的文化的ショックを、今の言葉で言えばマクロな環境の次元から熱弁していらっしやる。しかもそれをわが国の「教育性」の乏しさという側面から語っていることに強くひかれました。人は教育を受けることによって初めて人間になる、つまり、カントやランゲフェルトなどが人を Homo Educandum と語った意味では、教育の前に人間は平等だとも言え

ます。しかし、倉橋先生が自らを日本人と意識して捉えた「教育性」においては、対等なる個人の次元では比べるべくもない、東洋と西洋とを隔てる高い壁が痛感されてきました。留学されるずっと以前から、教育における「環境」の重要性を指摘していた先生は、欧米に足を踏み入れて、その環境の違いが想像を絶するものだったのでは？ いずれかが遅れていたり進んでいたりと違うとは別の、人間社会の成り立ちの違いだったのだと思います。

フランクな人間の「教育性」

文献を通じて西洋の教育研究の到達点を熟知していたはずの倉橋先生が、実際に現地の人々や文化に触れて感じたことは、その「教育的空気」の違いでした。何から何まで素晴らしいわけではない欧米社会の現実にも触れ、その消極的な側面には気づきながらも、否定できなかつた積極面について次の四つの特徴を挙げています。①社会を構成する人々の中にある「イニシアチブネスに促す力」、②生活の調子を絶えず高めようとする「エレベーションの力」、③人間の正直な生活を容易にさせる「フランクネス」、そして④社会集団勢力における「ビューマンファクターの力」です。私には、この三つ目の「フランクネス」の概念が特に面白く感じられました。

……欧米の生活殊に英吉利や亞米利加などの生活が我國より社会全體としてフランクであると思つたのであります。英米にだつて嘘付もありません、偽善者もありません、たとへうそれでも各自社会的に旗幟闡明にして自分の生活をして居るのです。處が我國に於ては個人的、對人的には成程正直であり、信義を守る國民でありませうが、社會に其自己を現はして行く現し方と云ふものは頗る

曖昧模糊として旗幟の不鮮明なものが多い。(中略)殊に我國に於ては昔からどうも豪い人は要領を得ないとか、世を渡るには表面を模糊として置くのが宜いとか、ぼつとして捉え所のないのが偉人とかいふ、所謂東洋流と云ふ事があります。(中略)斯の如くにして總ての物を隠して、自分と云ふものを事實に現はす事無く、他人も、亦其の眞實を現するものでないと考へて仕舞ふ。それで何處にフランスが育くませう。(中略)

フランスを主として個人の自由を認める。自由と云ふのは形の上から見たのであるが、其人の態度、何處までも正直な傾向を作ると云ふ風であれば、其處に人間性といふものが充實して来る。人間性と云ふ言葉は今日に於て我國の一つの流行語のやうであつて、いろいろの六かしい意味がありますが、私のここに考へるのは、必ずしもそういふ複雑な意味でなく、人間を人間として認めるということです。器械的に形式的になり易い、集合的生活事務生活の中にあつても、其一つの集合の中のメンバーとして、其人を一人の人として、何處までもハツキリと見失はない様にするといふ意味です。此點に於て歐米の生活が吾々の生活とまた餘程違ふのであります。(中略)私は亞米利加で色々な役所だの學校などを參觀します時に、必ず其處の長なる人に紹介されるが、其時此人は校長であるとは云はないで何の某だといふ。また受持教員などでも、我國の様に擔任といはずに何の誰といふ。さう云ふ風にいつでも役目より人が主になる。

——『倉橋惣三 保育人間学セレクション』第二卷(浜口順子編 学術出版会二〇一七年) pp. 187 - 209 から

私もオランダの學校や役所を訪問して同じような経験があります。小学校や中学校に行つても、書類の積まれた事務机が並ぶ職員室はなく、先生たちはソファや椅子に思い思いに腰をかけてミ

ーディングをしていて、その中のまさかという方が校長先生でした。だからと言って、日本でもすぐにそのフランクさを取り入れればいいという単純な話ではなさそうです。あちらでは、人がそれぞれ違う考えを持っていることが前提になっていて、なんとなく相づちを打って話を合わせているだけだと、一人前（参加者）として認めてもらえないところがあります。わかりきったこと、当たり前のようなことでも、言葉で発言して会話に参加していることを示す必要がある。そういう難しさを感じました。こんなこともありました。オランダの幼稚園の園庭で、私がいつもの癖でなんとなくほほ笑んだ表情で観察していたら、一人の子が近づいてきて私の顔を見つめ、「なんで笑っているの？」と不思議そうに聞くのです。心と表情、あるいは意思とコトバがストリートに結びつく（ように少なくとも示すこと）ことが、西洋の「正直さ」であり、フランクネスなのだと思います。「以心伝心」や「曖昧模糊」をよしとするわが国の社会感覚は、倉橋先生の時代とさして変わってはいません。これほど違う社会感覚を生きているのですから、西洋の教育思想や教育方法を、書物で読んでも、わかったふうでいるだけなのかもしれません。

倉橋先生はアメリカの最先端の新教育的な幼稚園実践を視察し、確かに評価はしていらつしゃいますが、実は、田舎の小さい家のような幼稚園のほうを熱心に理想郷のごとくに紹介されています（倉橋惣三『子供讃歌』フレーベル館 一九五四年 参照）。しかし、当時四十歳近かった倉橋先生が自らの使命として課していらしたのは、家庭的な理想の幼稚園を一つ一つつくることではなく、社会のより多くの子どものための幼児教育の基盤、仕組み、組織をつくるということでした。東洋と西洋、幼児教育の生活性と社会性の狭間で、おそらく複雑な感慨をもって帰国され、帰国後の日本でこれからあらためてどういう仕事をしたものか、考えていらした頃に違いありません。